



《教育長メッセージ 第71号》

伊藤文康「教育長の部屋」については、第70号で、次回の題名は『忘れたこと』として、長い間、休止していました。

そのような中、10月17日から職としての8年目がスタートし、任期としては、残り5ヶ月ほどになりました。

私としては、残りの任期の期間に、第100号をめざし、再び、配信を開始したいと考えたところです。

機会があれば、多くの方に目を通していただければ幸いです。

あらためて、「教育長の部屋」をよろしく申し上げます。

『忘れたこと』

前々回の第69号『第2期えびなっ子しあわせプラン』において、今後3年間の海老名市の学校教育の取組について、その概略を説明させていただきました。

実は、今回のプランを構想するための素案の段階では、私の中では、学校教育で一番に取り組みたいことがありました。

それが、「忘れたこと」です。

意図的に忘れたのですが、「忘れたこと」＝「ひとりひとりの学び」ということです。

40年ほど前、私が教員になった頃は、授業は、効率的に集団の学力を高めるための一斉指導が主流でした。

教職員は、学習の到達基準(子どもたち全員に身につけさせたい学力)に子どもたちが達することができるように、さまざまな工夫をして、授業を展開していました。

その頃の先輩方の努力には、若い私には、追いつけませんでした。

しかしながら、私は、その頃、「体育」の研究をしていて(若い先生の多くは、体育を担当させられる傾向がありました。)疑問に思ったことがありました。

例えば、鉄棒の逆上がりの学習です。

「逆上がりができる。」という到達基準では、もうすでに学習しなくてもできている子どももいれば、練習や努力だけでは、できることが難しい子どももいました。

練習して、努力して、できるようになるという学びの過程は、子どもたちにとって大きな意味を持つこととなりますが、鉄棒の学習の中で、他に

も、すべての子どもが達成感を得られる学習方法があるのではないかと思ったのです。

その頃、若い私が、一番首をかしげたのは、「クラス全員が逆上がりができるようになる。」という目標を掲げて学習に取り組むことでした。

できない子をみんなでサポートして、応援します。そのこと自体は、価値のある活動であることは認められます。

また、集団でひとつの目標を達成することの意義は大きく、クラスの連帯感や結束を高めるためには、有効な手段のひとつである言えます。

しかしながら、そのための場面が、鉄棒の逆上がりである必要はないし、何より、できない子どものことを考えると、私には、その方法を取り入れることはできませんでした。

私が、取り入れた学習方法は、「めあて学習」でした。若い頃の海老名市の教職員の仲間で研究して、取組をはじめた方法で、鉄棒なら、逆上がりに限らず、さまざまな技から自分が挑戦する技を選び、それを「めあて」として、学習するものです。

自分にあった「めあて」を立てるところから、学習中もひとりひとりに指導・支援する必要がある、一斉での授業より労力を費やさざるを得ない方法ですが、ひとりひとりの達成感とひとりひとりの学びを保障する方法でした。

その後、体育だけでなく、国語や算数などの教科学習でも「ひとりひとりの学び」を意識するようになりました。

そして、ひとりひとりが見えるようになり、ひとりひとりの学習経験や学習能力に合わせた授業を心がけるようになりました。

私としては、「第2期えびなっ子しあわせプラン」の重点である「授業改善」の中で、「ひとりひとりの学び」について、海老名市の教職員とともに、研究を進めたいと考えているところです。

子どもたちが、毎日、学校に通って、また、学校に通っていなくても、その学びが保障され、ひとりひとりに応じた学ぶ喜びを実感しているか、教育は、その実感を保障しなければなりません。

次回は、『多様性』について、私の考えを述べてみたいと思います。